

特別講演

「インドネシアにおける
日本文化の普及と展望」

倉沢 愛子 氏

慶應義塾大学 名誉教授

2016年3月講演

1 日本のポップカルチャー、マンガ、日本食が人気

私はインドネシアとの関わりが長く、1960年代後半に日本においてインドネシア研究の最初の大きな波があった時の第一世代に当たります。大学の卒論でインドネシアを研究し、以来40年以上、インドネシアのことばかりやってきました。初めてインドネシアに留学したのは1972年で、ジャカルタも今とは全く違うところでした。これからお話しする「日本文化の普及と展望」は私の専門外ですが、定期的にインドネシアを訪れる中で知ったことや感じたことをご紹介します。

まず、インドネシアにおける日本文化の浸透について取り上げたいと思います。その一つとして、J-POPといわれるポップカルチャーがあります。1990年代の初め頃から日本の漫画やアニメがかなりブームになりました。以前は雑誌などの印刷物やテレビでしたが、ここ数年はインターネットを通して日本文化に触れるスタイルが一般的になってきました。

次に挙げる JKT48は、インドネシアでも AKB48のコンサートなどをネットで見た人たちの間で、実際にデビューする前から既に知られていたとのこと。そういう人たちは日本語も非常に上手で、日本語学科でフォーマルに学んだ人よりもっとナチュラルな日本語を話したりします。

ジャカルタのスナヤン地区の FX モールに JKT48の劇場があり、毎朝7時から公演をしているそうです。入場料の1000円は、当地の若者にとって非常に高い金額です。また、AKB48のようにファンとの握手会があり、大きな会場で1万人くらい集めて行われています。CDを買うと握手できるので、何枚も買う人がいて、小遣いを一生懸命に貯めてやっと工面しているようです。これがすごいブームになっているということは、彼らがいかにそれを欲しているかということの表れだと思います。

10数年前の漫画本が中心だった時代に調査をしたことが

ありますが、日本円にすると1冊100円と高いにもかかわらず、ドラえもんをはじめとする漫画本がたくさん出回っていました。テレビアニメは、1989年に初めて民間放送が許可されたために、放映がどんどん増えました。そこに日本から広告代理店が参入してスポンサー企業を募集し、大々的に始まりました。

また、日本食ブームがすごい。高級な日本食レストランは以前からありましたが、今はカジュアルな日本料理の店を、例えばインドネシア大学のあるデボック地区などではたくさん見かけます。たこ焼き、お好み焼き、寿司、ラーメン——インドネシアはムスリムが多く、豚のスープは禁忌なので、チキンのラーメンが人気です。最近出店したイオンモールの中には、ラーメン店ばかり集めた一角があるくらいです。

日本食ブームは健康志向にも合っているのでしょう。寿司も、握りより巻き寿司が中心で、カリフォルニアロールのようにちょっとアレンジしたものが好まれています。ここ数年で日本のコンビニがだいぶ増えましたが、おにぎりをそのまま「オニギリ」という名前で売っているし、弁当類もたくさん出回っています。

2 日本文化の浸透を支える日本語学習熱

インドネシアでは外資系の小売業が許可されないため、おかしな話ですが、コンビニの多くは飲食業の枠で許可を得てスタートしています。店内のかなり広いスペースにテーブルといすを置き、店で買ったものをそこで食べるのが主であり、ついでにいろいろなものを売っているという、こじつけのような形式で始まりました。そのため、若者が集まって飲食しながら時間をつぶす場にもなっています。

おにぎりが一つ70円というのは、この国の所得水準からするととても高いのですが、結構売れています。中身は梅干しはだめで、ツナマヨなど当地の好みに合う味付けが工夫されています。こうしたバリエーションはあるものの、日本食がブームになっています。

ちょっと特殊なケースでは、2015年に日本で設立された日本ムスリムファッション協会の努力により、和服の生地で作ったムスリム服をインドネシアで販売できないかということで、非常に多くの業者さんが当地を訪れているようです。日本の家庭では、もう着ることもない和服がタンスの奥にたくさん眠っていますよね。それを買取り、ほどいて洗ってイスラム服を作る。古いものだけではなく、新しい着物の生地の見本をこちらのファッションデザイナーに見せると、珍しい素材なので非常に喜ばれ、ここ1～2年で急速に受け入れられています。

また、2015年12月から2016年3月まで10回にわたって放送された「ザ・一番」というテレビ番組が、非常に人気を集めました。内容は日本紹介で、JKT48のメンバーが何人か来日して、いろいろな分野で日本一素晴らしいものを見つけて紹介するというものです。

こうした日本文化の浸透の裏側には、日本語学習への興味があります。国際交流基金の2014年のデータによると、インドネシア全域の日本語教育機関は、大学、高校、専門学校などの正規の学校が2346もあり、日本語教師が4538人、学習者数は87万2411人に上ります。

驚いたことに、日本語学習者の95.8%は高校生です。高校では英語が第1外国語ですが、第2外国語は中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、アラビア語、そして日本語から選択できます。ただ、どの高校も全部そろっているわけではなく、ある高校はフランス語と日本語だけというように、1～2カ国語に限られます。そういう中で日本語を選ぶ高校が結構多く、特に観光専門高校では多いようです。

このように、日本語学習者の圧倒的多数は高校生であり、先ほどから見てきたポップカルチャーの最大のコンシューマーも高校生の年齢層です。この世代が、日本文化を吸収していく中心になっています。

一方、日本で学ぶインドネシアからの留学生は2276人、そのうち国費留学生は609人です。日本からインドネシアに来ている留学生の数はちょっと分らなかったのですが、だいぶ増えています。というのは、私が1972年に留学した時は、インドネシア全土で5人くらいでしたが、今ではたくさんの留学生がおり、特に短期や半年～1年の留学生が非常に多いようです。2276人に対して、おそらく100人以下だとは思いますが、非常に増えていることは確かです。

3 意識や消費スタイルの面で中間層的な人々が増加

こういった日本文化の浸透は、社会のどういった変化に支えられているのでしょうか。日本文化の最大の消費者である10代の若者が、社会全体の中でどのような地位にある

のかというと、政府主導で1970年代から家族計画が進められ、1980年代の中頃になって急速に定着しました。中国の一人っ子政策と違って強制ではなかったものの、「二人で十分」というスローガンを掲げてかなり成功し、少子化現象が起こってきました。平均するとまだ二人より多いのですが、かつてのような8～9人ということはありません。

少ない数の子どもを産んで大切に育てようになると、教育に対する投資が増えます。こちらの教育ママはすごいし、学校以外の教育に支出する金額もすごい。例えば、レッスンです。学校の教科以外に、英語のレッスンやピアノのレッスン、あとは宗教のレッスンとしてクルラン（コーラン）の読み方を学ぶ教室もあります。

インドネシアでは、小学校、中学校、高校の卒業時に、それぞれ全国一斉の試験があります。単なる可否だけではなく、何点で合格したかが次に上の学校に行く時の目安になるのです。学区制は有名無実で、名門校には優秀な生徒が集まってきます。

中学に入る時は、小学校卒業時の統一テストの点数が問われます。1点でも多く取るために、子どもが小学校6年や中学3年になると、親は必死になって塾に行かせます。それほど教育を重視しているために、国民の教育水準が上がってきて、大学進学者も増えています。所得水準の増加以上に教育に消費する割合が、高まっているようです。

教育の面から見るということは、意識改革も含まれるわけですが、人々の価値観という面でも、そして実際の所得水準からしても、社会の中で中間層に近い人たちが増えているということがいえると思います。長い間、この国には上層と下層がいて中間層がないといわれてきました。特に、オランダの植民地時代はそういう社会構造でした。先日、何かの調査結果を見たのですが、自分を中間層と思う人の割合が、実際よりも非常に多かったそうです。意識や消費スタイルの面で中間層的な人々が、とても増えているということです。

別の角度からインドネシアの景気をみると、2015年の訪日インドネシア人旅行者は16万人で、全外国人の1.2%とわずかではあるものの、非常に増加しています。また、訪日インドネシア人の消費額は302億円であり、前年度から58.6%も増えています。そのうちの80億円を買い物で使っており、ヨーロッパから来た観光客などと比べると非常に多いという結果が出ています。

4 両国の歴史的関係は古く、戦国時代から日本人が渡航

日本とインドネシアの歴史的な関係は古く、戦国時代から日本人の渡航がありました。最も多かったのは朱印船貿

易のような形でやって来る商人ですが、戦国時代の浪人をオランダの東インド会社が雇って連れてきて、インドネシアの征服戦争に傭兵として使いました。オランダや他の国から来た傭兵もいましたが、重要な要素として日本人傭兵が使われたという歴史があります。

ジャカルタはかつてバタビアと呼ばれていましたが、実はオランダが築いたバタビアという都市は、現在のジャカルタ北部のコタという地区に当たります。城壁に囲まれていたのでバタビア城とも呼ばれますが、その建設に、日本で築城建築の経験がある左官や大工が契約職人として採用され、連れてこられました。しかし、日本が鎖国したために両国の関係が途絶え、バタビアに来ていた日本人は帰れなくなりました。現在では、当時の日本人コミュニティの痕跡を見ることはできません。

明治時代になって、日本人の渡航が復活しました。多かったのは、本人の意思に反して連れてこられた、「からゆきさん」と呼ばれた日本人娼婦です。そうした時代の後で商業移民を中心とした渡航が始まり、各地で日本人コミュニティが作られます。東南アジアではフィリピンやシンガポールなどで日本人が多かったのですが、インドネシアは1930年代になって6000人くらいに増えました。小さな店を営んでいる人が多かったようです。

日本との文化交流という面では見るほどのものはありませんが、日本のもので非常に好まれたものがいくつかあります。その一つは、目薬をはじめとする売薬です。西洋医療の恩恵にあずかれない一般の庶民に、日本の目薬や正露丸、仁丹などが非常に歓迎されました。

こうした個人レベルの移民がしばらく続いた後で、第二次世界大戦中の1942年に日本軍が攻めてきて、オランダの植民地政権を倒して軍による占領統治を始めました。この時代は、日本が国策として大規模に日本文化を売り込んだ時期です。特に、「教育と文化の基本は八紘一字に置く」と明記され、日本的価値観を現地に植え付けるための施策が進められました。例えば、主人に対する忠誠心とか親に対する孝行、国家に対する奉仕といった精神を植え付けようと、宣伝部という役所を設け、日本から多くの文化人や芸術家を派遣し、プロパガンダのためのマテリアルを作りました。画家はポスターを描き、脚本家は演劇の脚本を書いてインドネシアで上演する。そうやって日本的価値観の普及を図りました。

『大東亜諸民族の化育教策』という文書には、「従来の欧米優越感および米英的世界観を排除し、皇道の宣揚を期するも、各民族固有の文化、伝統はこれを重んず」とあります。欧米文化の否定と日本文化の押しつけだけではなく、ジャワの伝統文化がいかに素晴らしいかということを宣伝

し、伝統芸能などをいろいろなところで優先的に使いました。こうして日本の文化や精神を植え付けようとしたのに対して、現代のインドネシアにおける日本文化の受容は、インドネシア人が自ら選んだものです。

戦後、1958年に日本とインドネシアの国交が樹立され、1960年代から大規模な企業進出が始まります。外資の導入が許され、経済優先の関係が長い間続きました。その頃、日本人は、経済以外には興味を持たない「エコノミックアニマル」と呼ばれました。1974年に田中角栄首相がインドネシアを訪問した時には激しい反日デモが起こり、その反省から、ちょうど設立されたばかりだった国際交流基金のような団体の活動が重視され、日本文化の紹介や経済以外の分野の交流を深める努力が続けられています。

皮肉なことに、こうして一生懸命に努力したルートとは別に、先ほど申し上げたインターネットやYouTube、あるいは漫画といったものを通して、インドネシアの人々が自分たちで面白いと思った日本文化をどんどん取り入れ、根付いているのです。能や歌舞伎、生け花、茶道といったものにはなかなか関心を示してくれなかったのに対して、ポップカルチャーがあつという間に入ってきました。

私の専門はポップカルチャーではなく歴史であり、特に、占領期に日本が何をしたかということを研究しています。生活の中で見聞きした範囲内であればご質問にお答えできますので、よろしくお願いします。

質疑応答

A： 日本占領下で行われた、国策に基づく日本的価値観の普及政策は、今に至るインドネシアの社会にどのような影響を与えたのでしょうか。

倉沢： 日本による占領は終戦のために3年半で終わったので、その後も続いたものはあまりありませんが、よくいわれるのは町内会の隣組制度です。これは、戦時下の社会統制のために、日本の隣組や町内会、部落会制度を導入したもので、為政者にとって便利な制度だと思われたようです。廃止されたり復活したりしたあげくに、開発独裁といわれたスハルト政権が1970年代から法律で定め、全国一斉につくらせたものがいまだにかなり強く残っています。

隣組制度は基本的には助け合いの制度であり、なおかつ相互監視の組織で、日本の戦中の隣組と同じです。しかし、ゲートッドコミュニティのような高級住宅街ではあまり活発ではなく、庶民が暮らしているカンボンとか農村部では根強く残っています。

日本の制度が残っているというよりも徐々にプラスの影響を与えたということでは、ほかに言語政策があ

ります。インドネシアは多民族多言語社会ですが、独立時に、マレー半島で使われているマレー語をインドネシア語と読み替えて国語に採用しました。その定着に際して、日本軍の政策がちょっとした役割を果たしたのです。

日本の占領時代に、行政や教育の場におけるオランダ語や英語などの敵性語の使用を禁じました。しか

し、各民族がそれぞれの言語を使ったのでは収拾がつかないので、マレー語を統一言語として採用し、それを独立後のインドネシア政府がそのまま引き継いで国語に定め、振興を図ったというわけです。日本のおかげとはいえませんが、日本が既に始めていたことが幸いしたと、インドネシアの言語学者も肯定的にとらえているようです。